

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
(言語聴覚学) 専門科目	言語聴覚障害学総論 言語聴覚障害概論	言語聴覚障害の特徴を理解した上で、機能的な問題に加え、日常活動の制限や社会参加の制約をもたらすことを学ぶ。言語聴覚障害に対する言語聴覚士の役割を学ぶ。また、これらの学習を通して言語聴覚士に求められる資質、責任を学ぶ。チーム医療の基礎能力を身につけることを目的に、グループ学習を通して他者と協同することの重要性を学ぶ。	
(言語聴覚学) 専門科目	言語聴覚障害学総論 言語聴覚障害診断学演習	言語聴覚障害概論や各障害学・評価演習を踏まえ、言語障害の種類その原因疾患、障害の発現メカニズムを理解し、障害の特徴及び診断法を学ぶ。評価結果を解釈し、機能的な側面に加え、対象者の日常生活に与える影響を考察する過程を学ぶ。	
(言語聴覚学) 専門科目	言語聴覚障害学総論 言語聴覚研究方法論	言語聴覚障害に関わる今日的課題を設定し、その課題について研究するための方法論について学ぶ。まず、研究とは何かについて整理し、どのような研究方法があるのか、具体例について先行研究を参考に研究方法について検討する。学生は各自が興味を持った文献について、文献抄読・発表・討論を行い、言語聴覚研究の準備を開始する。さらに、研究活動を行う上で研究の公正を守らなければならないことや科学研究を臨床の場で行うためには倫理審査やインフォームド・コンセントといった具体的な手続きが不可欠であるといった研究倫理を理解する。	
(言語聴覚学) 専門科目	言語聴覚障害学総論 言語聴覚研究	言語聴覚障害領域および関連領域において発生した諸問題の中から、自らの関心に基づいて研究を行う。言語聴覚療法の対象者の臨床に寄与するテーマを卒業論文中間発表会を経て設定する。担当教員の指導のもと、研究計画を立案し、それに基づき情報収集、調査分析、実験、結果の整理、考察等を行い、卒業論文を作成する。論文作成と同時に卒業論文口頭試問を行う。	

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
(言語聴覚学) 専門科目	失語・高次脳機能障害学 失語症学	<p>神経心理学の知見をベースに高次脳機能障害の中核をなす失語症の歴史や脳の古典的言語領域について整理する。そして、失語症の言語症状と失語症候群およびその評価と訓練について学ぶ。さらに、失語症のグループ訓練をはじめ、失語症者の心理的問題や社会参加などについて幅広く学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (全10回)</p> <p>言語の神経ネットワークや言語情報処理のモダリティについて理解を深める。さらに、失語症を引き起こす原因疾患について知り、失語症候群の古典的分類や言語障害を引き起こす脳内メカニズムを学ぶ。さらに、失語症者の心理的問題や社会参加などについて幅広く学ぶ。</p> <p>(全5回)</p> <p>認知神経心理学的モデルを用いた失語症の病態解釈について学習する。</p>	オムニバス方式
(言語聴覚学) 専門科目	失語・高次脳機能障害学 高次脳機能障害学	<p>神経心理学と神経科学の知見から高次脳機能の神経メカニズムについて理解を深める。</p> <p>脳が損傷を受けたために、言語、行為、認知、記憶、注意、遂行機能、社会的行動などの高次の精神機能が障害された高次脳機能障害について学修する。具体的には視覚・聴覚および触覚認知の障害(失認)、視空間認知障害、行為・動作の障害(失行)、身体意識・病態認知の障害、記憶障害、注意障害、前頭葉機能障害(ワーキングメモリ機能、遂行機能)、脳梁離断症状、社会的行動障害などの神経学的背景、症候について学ぶ。認知症の診断・評価およびリハビリテーションの実際についても理解する。</p> <p>さらに、高次脳機能障害者の社会参加(就学・就労)の問題についても学ぶ。</p>	
(言語聴覚学) 専門科目	失語・高次脳機能障害学 失語症評価演習	<p>失語症および周辺症状の評価において臨床上高頻度で使用される基本的な検査を深く理解し、その実際について演習する。</p> <p>特に失語症の鑑別診断検査として、言語聴覚療法の臨床場面で幅広く使用されている標準失語症検査(SLTA)については、概要・構成を理解し、検査の実施方法と採点、結果の解釈について詳しく学ぶ。そして、標準失語症検査以外の総合的失語症検査、コミュニケーション能力検査の手続きを学ぶ。さらに、失語症のスクリーニングテスト、ディープテスト、コミュニケーション能力検査などについて紹介する。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
(言語聴覚学) 専門科目	失語・高次脳機能障害学 高次脳機能障害評価演習	失語以外の他の高次脳機能障害（記憶障害、注意障害、失行、失認、遂行機能障害、前頭葉機能障害、認知症）について、一般的な評価・診断の原則を概説する。検査実施上の注意点、観察のポイント、検査結果の整理と解析方法についても概説する。 WMS-R（日本版ウェクスラー記憶検査改訂版）、BADS（遂行機能障害症候群の行動評価）、SPTA（標準高次動作性検査）、VPTA（標準高次視知覚検査）、CAT（標準注意検査法）、などの高次脳機能検査の概要・構成を理解し、検査の実施と採点法を学ぶ。HDS-R（長谷川式簡易知能評価スケール）、FAB（前頭葉機能検査）、MMSE、レーヴン色彩マトリクス検査、コース立方体検査などの高次脳機能障害のスクリーニング検査の概要・構成を理解し、検査の実施と採点法を学ぶ。	
(言語聴覚学) 専門科目	失語・高次脳機能障害学 失語症治療学	「失語症学」と「失語症評価演習」で学んだ知識と技術を基に、失語症者へのリハビリテーション的アプローチについて、障害の全体像を把握し、各種検査結果から抽出された問題点に沿った代表的な訓練法について学ぶ。さらに失語症者への言語治療の原則や各期治療計画の立て方および治療効果のアウトカム測定方法について学修する。また、失語症のリハビリテーションの実際と、失語症者の生活向上や支援および社会参加の促進について考える。	
(言語聴覚学) 専門科目	失語・高次脳機能障害学 高次脳機能障害治療学	「高次脳機能障害学」と「高次脳機能障害評価演習」で学んだ知識と技術を基に、高次脳機能障害例へのリハビリテーション的アプローチについて、障害の全体像を把握し、各種検査結果から抽出された問題点に沿った代表的な訓練法について学ぶ。さらに高次脳機能障害者への治療原則や各期治療計画の立て方および治療効果のアウトカム測定方法について学修する。 また、高次脳機能障害のリハビリテーションの実際と、高次脳機能障害者の生活向上や支援および社会参加の促進について考える。	
(言語聴覚学) 専門科目	言語発達障害学 言語発達障害学	小児言語聴覚障がい阻害要因を通して、言語発達障がいの類型、発生機序、症状、評価・診断・支援の原則と流れについて学ぶ。支援の原則についてはコミュニケーション障害体験演習を実施し、当事者の視点に立った支援の在り方を検討する。 (オムニバス方式/全15回) (全11回) 小児の障がいの阻害要因と小児言語聴覚障がいの類型の概略を理解し、知的障害、発達障害、脳性麻痺に関して評価から診断への流れ、支援の原則について学習する。 (全4回) 学習障害に関連する障害の、評価から診断への流れ、支援の原則について学習する。	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
(言語聴覚学) 専門科目	言語発達障害学	言語発達障害学で学んだ知識をもとに、言語発達障害児に用いられる代表的な検査の概要、構成を理解し、検査の実施～解釈までの基礎的知識を習得する。情報収集～評価結果のまとめまでの流れやポイントを学んでいく。更に言語発達障害の原因別評価方法について学ぶ。指導・訓練については子どもの発達段階、障害特性の評価から訓練プログラムの立案を行う。また、対象児の能力評価が適切に行えるよう面接技法を演習的に習得する。 (オムニバス方式/全15回) (13回) 言語発達検査における面接技法、ならびに間接評価と直接評価について種々の検査技法から報告書までの流れを修得する。 (2回) 言語発達検査の中でも発達障害に関連する評価について、実施から解釈までの基礎的知識を学ぶ。	オムニバス方式
(言語聴覚学) 専門科目	言語発達障害治療学	言語発達障害児1人ひとりの状況とニーズにあった支援方法について学ぶ。 言語発達障害児の指導には発達段階に即した指導と障害特性に応じた指導方法があり、さまざまな指導技法も提唱されている。まず代表的な指導・支援方法(語用論的アプローチ、拡大・代替コミュニケーション、TEACCHなど)について、理論的背景とその実際について学び指導の方法を習得する。子ども1人ひとりの状況とニーズを知り、その子に合った支援を行えるよう、各ライフステージにおける支援の方法についても考慮する。 また、北陸の療育システムの実際と課題を知るために、学生がグループ単位で現況調査を行い、まとめる演習を実施する。 (オムニバス方式/全15回) (全7回) 言語発達障害児の指導中、発達段階に即した指導法について学習する。 (全8回) 同じく、障害特性に応じた指導方法について学ぶとともに、北陸地域の小児療育の現況を調査する。	オムニバス方式
(言語聴覚学) 専門科目	言語発達障害学	乳幼児から児童期の言語発達障害児への指導に際して、子どもたちの発達や障害特性に応じた指導を行うためには、指導計画の立案、教材の選択や制作、その使用方法の熟知が必要である。市販の教材・教具に頼るだけでは不十分である。子どもたちの特性を理解し、特性を考慮した教材・教具の作成が必要になる。実際の指導・治療場面で子どもに応じた適切な指導ができることを目標に、どのような指導方法が適切か、子どもの興味関心を引く教材は何かを考え作成し、作成したものを使って子どもたちが楽しんで指導が受けられるような技能を養う。 また、発達段階に応じた絵本の選択法と読み聞かせの仕方について演習を行う。	

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
(言語聴覚学) 専門科目	発声発語・嚥下障害学 病理音声学	<p>発声発語・摂食嚥下の障害の発現機序を学修する。運動性と器質性の発現機序と症状の違いと特徴を理解し、機能訓練の方法がそれによって異なることを理解する。また、障害の種類によっては、一旦障害が生じると、発声発語、摂食嚥下の問題が生じること、また、コミュニケーションへの支障が出現することを理解する。このことが評価の助けになるのはもちろん、訓練の対象になることを学修する。さらには、QOLの低下につながることも理解し、その問題の解決への支援も言語聴覚士の役割であることを学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式/全8回) (全4回)</p> <p>発声発語器官の障害の発現機序を学修し、運動性障害と器質性障害における病態の違いについて学ぶ。発語器官の問題が、コミュニケーションへ与える影響を理解し、心理的問題及び社会的問題について学ぶ。</p> <p>(全4回)</p> <p>摂食嚥下に関連する器官や神経について学修し、正常な嚥下機能について学ぶ。それらの器官・神経の問題が患者に与える影響を摂食嚥下の側面から理解をする。</p>	オムニバス方式
	発声発語・嚥下障害学 発声発語障害治療学Ⅰ(小児)	<p>構音障害とは、話しことばの特定の音が正しく発音されず、それが程度固定化している状態をいう。子どもの構音障害は、原因は何であれ発達途上の問題であり、その理解と対応には言語獲得後に生じた成人の構音障害とは異なる視点が必要である。</p> <p>授業では子どもの構音障害を理解するために必要と思われる、音韻の発達や発声発語器官の発生や構造などの基礎的知識と、評価から訓練までの臨床的概略について学習する。</p> <p>形態的異常により引き起こされる器質的構音障害と、形態上の原因がない機能的構音障害について、各タイプとその障害機序について学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (全12回)</p> <p>小児の構音障害の機能的構音障害と口唇口蓋裂を中心とした先天性要因による器質的構音障害について学習する。</p> <p>(全3回)</p> <p>口腔・咽頭がんなどの後天性要因による器質性構音障害について学習する。</p>	オムニバス方式
	発声発語・嚥下障害学 発声発語障害治療学Ⅱ(成人)	<p>成人の発声発語障害には運動障害性構音障害、器質的構音障害を含む。</p> <p>これらの違いならびに下位分類としてのタイプ分類を理解したうえで、それぞれの治療法の違い、生活支援の違いを学ぶ。</p> <p>生理音声学および病理音声学で学んだ発声発語器官の運動とその異常を踏まえ、運動障害性と器質性の障害の臨床上的特徴の違いおよび評価・訓練技法を学ぶ。運動性構音障害においては、障害のタイプによって適用すべき訓練手法が異なり、不適切に行えば、悪化させることもあるので、きちんと理解しなければならない。多くの場合、発話の明瞭度低下は完全には回復しない。そのために、代償手段とその適用指導についても十分学ばなければならない。同時に、明瞭度に制限がある状態での社会参加に対しては、地域社会の側の理解と協力が不可欠で、そのための支援についても理解する。</p>	講義20時間 演習10時間

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
(言語聴覚学) 専門科目	発声発語・嚥下障害学	<p>音声障害は、呼吸器レベル、喉頭レベル、鼻腔共鳴レベルでそれぞれ、運動障害性、器質性、機能性の障害に分類される。それぞれの鑑別、検査法、治療手技、生活支援について学ぶ。</p> <p>非流暢性発話は、流暢に発話することが困難だが、音声や構音には異常がない。この特徴をふまえて、治療法や環境調整について学修する。 (オムニバス方式/全30回) (全18回)</p> <p>声の症状を中心に的確に評価するための検査方法について実践的に理解した上で、声の衛生指導を含む音声治療について具体的な手技を通じて理解する。最後に、代償手段について学ぶ。音声の喪失は、アイデンティティの喪失につながることを重視し、患者様の心理面についての支援が根底にあることを理解しなければならない。</p> <p>非流暢性発話の評価と支援は、症状の進展状態によって異なる。適切に実施しなければ、悪化させることに繋がる。また、ある段階からは、周囲の見方が当事者の心理に影響し、周囲のあり方によって悪化させる側面があることも学ばなければならない。適応の有無の判断も含めて流暢性促進の訓練方法を学ぶだけでなく、周囲への働きかけなど、流暢性そのものには直接働きかけない方法についてもきちんと理解しなければならない。</p> <p>音声障害の評価、訓練、声の衛生指導は演習形式を取り入れて行う。 (全4回)</p> <p>非流暢性発話の原因、症状、進展段階、間接法による吃音訓練について学ぶ。 (全8回)</p> <p>非流暢性発話の心理的要因、環境的配慮、流暢性促進訓練について学ぶ。</p>	オムニバス方式
	(言語聴覚学) 専門科目	摂食・嚥下障害学	<p>人が食べる理由は、生命の維持だけでなく、人生の質（QOL）なども含まれる。摂食嚥下障害は、生命の維持またはQOLを大きく損なう原因となる障害である。授業では、人が食べるということの意味を理解し、その中に含まれている摂食嚥下機能について学ぶ。障害を理解する上で重要な、正常な摂食嚥下機能やそれに関わる器官・神経などの基本的な知識を習得する。摂食嚥下障害の原因となる疾患・摂食嚥下障害に伴う様々な問題について学習をする。</p>

授 業 科 目 の 概 要				
(保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
(言語聴覚学) 専門科目	発声発語・嚥下障害学	発声発語評価演習	音声学、発声発語系医学の知識を踏まえ、発声発語障害の評価の実践を、演習を通じて学修する。 発声発語における構音運動は、複数の器官の複雑な協調運動であることを学び、それらの器官について、運動範囲・筋力、運動の速さ・正確さなどの側面を評価する必要があることを学修する。さらに、適切な訓練法を選択するためには、適切な評価を選択して実施できることが前提となり、評価方法を誤ると症状の回復に影響を与えることを理解する。発声・発語器官の検査は演習を通じて学ぶ。 (オムニバス方式/全15回) (全10回) 成人の発声発語障害について、構音運動に必要な発語器官の運動評価について学び、それぞれの器官を評価する手技について演習を通じて理解する。 (全5回) 小児の発声発語障害について、構音検査・鑑別検査を通じて発語器官の評価を学ぶ。	オムニバス方式
	(言語聴覚学) 専門科目	発声発語学・嚥下障害学	摂食・嚥下評価演習	摂食嚥下障害は、誤嚥など生命に直結するリスクがあり、正確な評価が予後に影響することが少なくない。また、正確な評価は、対象者のQOLを向上させる上でも重要となる。正常な摂食嚥下機能の知識をベースとし、正確な評価技術の習得を目的とする。また、摂食嚥下障害で起きうるリスクについての安全管理についても学ぶ。スクリーニング検査などは、演習を通じて学ぶ。
(言語聴覚学) 専門科目	発声発語・嚥下障害学	摂食・嚥下障害治療学	摂食嚥下機能の基本的な知識をベースとし、患者の病態に合わせたリハビリテーションを提供する重要性を理解する。間接的訓練、直接的訓練、家族の指導などの種類や訓練方法を理解し、実践を通して習得をする。 (オムニバス方式/全15回) (全12回) 成人の脳卒中や神経筋疾患に伴う摂食嚥下障害に対するリハビリテーションについて講義を行う。間接的訓練、直接的訓練や訓練に伴うリスク管理について講義を行う。 (全3回) 小児の摂食・嚥下運動とその障害の特徴を理解しながら小児の摂食・嚥下障害の治療法を学修する。	オムニバス方式
(言語聴覚学) 専門科目	聴覚障害学	成人聴覚障害学	聴覚障害は他の言語・コミュニケーション障害に合併することも多く、その鑑別診断が重要となる。聴覚障害の特徴を理解し、重症度や発症時期、コミュニケーション手段などによる多様性を学ぶ。さらに聴力や聴覚障害全体の評価と機能回復訓練だけではない、障害の啓発や社会参加支援についても学修する。 (オムニバス方式/全15回) (全12回) 聴覚系の解剖と生理、難聴の種類ときこえの特徴、評価、難聴をきたす疾患について学ぶ。 (3回) 重複障害の種類、視覚聴覚二重障害者の評価と指導、支援機関や関係法規について学ぶ。	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
(言語聴覚学) 専門科目	聴覚障害学	聴覚障害の性質・程度を把握し適切なハビリテーション、リハビリテーションを行うために、各種聴覚検査法について目的、原理、結果の判定法について学習する。0歳から高齢者までの幅広い対象者に行う検査のため、対象者の年齢に応じた検査方法と具体的な配慮を習得する。聴覚障害の評価・診断に必要な聴覚検査法を症例に応じて選択、実施でき、結果の判定ができるようになることを目的とする。	
(言語聴覚学) 専門科目	聴覚障害学	先天性や言語獲得前の聴覚障害では音声が届き取りにくい、母子の愛着関係や人への興味などのコミュニケーションの基礎的な意欲が育ちにくく、言語獲得が遅れる。新生児聴覚スクリーニングや人工内耳によって早期発見、早期療育が可能になり、聴覚障害における言語聴覚士の役割は拡大している。他障害との合併も多いため、小児聴覚障害の根本的問題点を理解し、発達年齢に沿った適切な評価と訓練・支援の方法を習得する。また聴覚障害は理解されにくい障害であり、保護者支援も極めて重要であるため、その方法を学ぶ。視覚聴覚二重障害への対応についても理解する。 (オムニバス方式/全15回) (全10回) 小児聴覚障害が言語発達や全般的発達に与える影響を理解し、聴覚障害の評価と子どもの発達に合わせた指導、保護者や家族への支援方法を学ぶ。 (全5回) 重複障害児の評価と支援、乳幼児への人工内耳の適応、調整、言語指導、長期的な支援の方法について学ぶ。	オムニバス方式
(言語聴覚学) 専門科目	聴覚障害学	聴覚障害児・者のコミュニケーション行動の評価とリハビリテーションのための具体的な技術を習得することを目的とする。言語聴覚士としての訓練・支援方法を実際に使用できる技術として獲得する。 (オムニバス方式/全15回) (全12回) コミュニケーション訓練、聴能訓練、環境調整の具体的方法について学修する。 (全3回) 聴覚障害児・者への情報保障、環境調整について学ぶ。聴覚障害児・者の評価と分析、訓練や支援方法を立案する演習を行う。	オムニバス方式 講義12時間 演習4時間
(言語聴覚学) 専門科目	聴覚障害学	聴覚障害児・者に対する聴覚補償方法や援助方法について理解し、調整および装用指導や装用効果測定ができることをねらいとする。また、人工内耳については、その原理と補聴器との違いを説明し、人工内耳の適応、コード化法、マッピングを含め人工内耳のリハビリテーションについて習得する。	講義24時間 演習6時間

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
(言語聴覚学) 専門科目	臨床実習 臨床見学実習	<p>社会人としての適切な振舞い以外に、障害を持つ方へ接するうえでの基本姿勢を身に付ける。また、言語聴覚士として必要な基礎及び専門科目と、選択科目で学んだ内容が臨床場面で実際に活用されている様子を理解することを主な目的とする。</p> <p>具体的には、言語聴覚療法対象者がいる施設にて臨床実習指導者の指導・監督のもとで、臨床実習指導者が行う言語聴覚療法を見学あるいは一部実施する。課題は対象者の情報と心身の状態や行動の観察を行い、疾患による言語聴覚や摂食嚥下への影響（病態）を考え、病歴（障害歴）を適切な表現を用いて記述する。さらに、対象者との会話を通して、対象者の全体像を把握し、情報を収集する。</p>	
(言語聴覚学) 専門科目	臨床実習 臨床評価実習	<p>実際の医療場面で初めて行う長期実習である。医療従事者としての障害を持つ方を中心に据える姿勢を身に付ける。また、言語聴覚士として必要な基礎及び専門科目と、選択科目で学んだ内容を臨床場面で活用し、対象者が抱える問題の全体像を理解しようとする姿勢を身につけることを目的とする。</p> <p>具体的には、言語聴覚療法対象者がいる施設にて指導者の指導・監督のもとで、指導者が行う言語聴覚療法を見学あるいは一部実施する。課題は対象者の心身状態や行動の観察、情報の収集、病歴（障害歴）記述、検査の実施と所見記述、言語聴覚や摂食嚥下の問題点の列举と明確化、言語聴覚療法訓練の目標設定とする。目標設定には在宅復帰や社会参加を含めた長期の視点が含まれる。</p>	
(言語聴覚学) 専門科目	臨床実習 臨床実習 I	<p>臨床評価実習の目的に加え、関連職種との連携強化、対象者が抱えている問題の詳細な分析及び解決技能を身につけることを目的とする。</p> <p>具体的には、言語聴覚療法対象者がいる施設にて指導者の指導・監督のもとで、指導者が行う言語聴覚療法を見学あるいは一部実施する。課題は対象者の心身状態や行動の観察、情報の収集、病歴（障害歴）記述、検査の実施と所見記述、言語聴覚や摂食嚥下の問題点の列举と明確化、言語聴覚療法訓練の目標設定、訓練（目標、課題）の立案、実施とする。目標設定には在宅復帰や社会参加を含めた長期の視点が含まれる。</p>	
(言語聴覚学) 専門科目	臨床実習 臨床実習 II	<p>言語聴覚士として施設の中で多職種と連携しながら、対象者が抱えている問題の詳細な分析を行い、臨床現場に即した解決技能を身に付けることと臨床現場における課題の把握を目的とする。</p> <p>具体的には、言語聴覚療法対象者がいる施設にて指導者の指導・監督のもとで、対象者の情報と心身状態や行動の観察に加え、検査を実施し、評価と鑑別診断を行い、訓練・指導を考え、実践する。課題は対象者の身体・行動の観察、情報収集、検査の実施、問題点の列举、訓練（目標、課題）の立案、実施、再評価計画の立案とする。再評価の実施は実習状況に応じて選択的に行う。機能回復にとどまらず、生活支援や社会参加の支援を念頭に置いた訓練を実施し、現在の臨床現場や社会の問題点についても考察する。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
(言語聴覚学) 選択必修科目	選択必修分野 カウンセリング	カウンセリングには相談・助言の意味がある。相談的対話によってカウンセラー(相談者)はクライアント(来談者)を理解し、適応や人格的成長を援助する。また、カウンセリングには語源的に反省、熟考などの意味もあり、カウンセラーはクライアントとの対話とコミュニケーションを通して、クライアントの自己への内的対話の促進・進化を援助する。これらカウンセリングの心理学についての入門的・概観的講義を行う。	
(言語聴覚学) 選択必修科目	選択必修分野 言語聴覚検査演習Ⅰ(小児)	子どもは日々発達し変化している。そのため子どもの発達段階を理解し、言語領域の発達と関連づけて考えることが必要になってくる。そこで発達検査と、言語発達を支える認知機能を評価する知能検査の概要を学習する。 (オムニバス方式/全15回) (全8回) 発達検査の概要と代表的な発達検査の実施から解釈までを学ぶ。 (全7回) 知能検査の概要と、代表的な認知機能検査の実施から解釈まで学ぶ。	オムニバス方式
(言語聴覚学) 選択必修科目	選択必修分野 言語聴覚検査演習Ⅱ(成人)	知能は学習する能力、学習によって獲得された知識および技能を新しい場面で利用する能力であり、このような能力を測定するものに知能検査がある。また、性格に関する側面を把握する評価として人格検査がある。知能や人格の評価は臨床場面でも多く実施されており、症状分析の際の役割を担っている。よって授業では言語聴覚領法の臨床場面で幅広く用いられている知能検査および心理検査の概要・構成を理解し、検査の実施と採点法を学習する。 (オムニバス方式/全15回) (全10回) 成人の言語検査のうち、知能検査に分類される検査の実施と採点法の演習を行う。 (全5回) 成人の言語検査のうち、心理検査演習に分類される検査の実施と採点法の演習を行う。	オムニバス方式
(言語聴覚学) 選択必修科目	選択必修分野 言語聴覚評価演習	外部施設での臨床評価実習の前段階として、学内および臨床現場において教員立ち会いの下に、実際の症例に対して言語聴覚療法の演習を行う。臨床家として必要な基礎的な能力(身だしなみやことば遣いに留意できる、協力下さる症例やそのご家族に配慮できる、検査や訓練の準備を滞りなく行いスムーズに実施できる、等)を身につけることを目的とする。この演習において、これまで学んだ各領域の知識、技能を統合することを学習する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
(言語聴覚学) 選択必修科目	選択必修分野 地域参加支援演習Ⅰ(理論)	言語聴覚士を含めたリハビリテーション専門職の現状での障がい者支援は、障がいを軽減することに偏り、障がいを持ちながら、社会に参加することを支援することが少ない。「全人格的復権」は、具体的には、自立ならびに、健常者と同様の地域、社会への参加が保障されて実現される。それは、障がいのある方を変えることでは実現せず、受け入れる社会の側を変化させなければならない。この授業では、言語聴覚士が、コミュニケーションや摂食嚥下についての専門性を生かして地域づくり、街づくりをすることの重要性と方法論を学修する。 グループ単位で、情報収集、企画立案を行い、教員全員がアドバイザーとして参加する。	
(言語聴覚学) 選択必修科目	選択必修分野 地域参加支援演習Ⅱ(実践)	地域参加支援演習Ⅰの結果を踏まえ、実際に、学生がグループ単位で、障害のある方を含む社会的に弱い立場の方が、社会や地域に参加するための事業を企画する。 ここでは、当事者と支援者の言語聴覚士だけではなく、地域で実際に生活する一般の方々との連携が必須である。当事者と支援者、一般の方々の三角形を形成しながら、事業を企画し、相談し、計画し、運営することにより、連携の難しさを知り、それを克服する運営の方法と才覚を知り、実現することによる達成感を学修する。	
(言語聴覚学) 選択必修科目	選択必修分野 地域参加論	言語聴覚障害児者の地域参加を実現するためには、それぞれの機能障害へのアプローチと同時に、生活上の制限に対するアプローチや、障害児者を取り巻く物理的・制度的バリアーや情報・こころのバリアーの解消に向けたアプローチも必要となる。ここでは、それぞれの障害者が地域参加をすすめるための問題点を明らかにし、障害者の社会参加に向けた方法論を理解する。 (オムニバス方式／全8回) (全2回) リハビリテーションの基本的理念を学び、日本の医療制度の中で障害者の権利に関する問題点について学びを深める。 (全2回) 小児の地域参加や、障害児に関する教育などの概略を理解し、小児の地域参加の実際と課題について理解する。 (全2回) 地域包括ケア・在宅リハ、訪問リハなどの概略を理解し、障害者の地域参加の実際と課題について理解する。 (全2回) 成人・高齢者の生活や、介護保険サービスの概略を理解し、障害者の地域参加の実際と課題について理解する。	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要			
(保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
選択必修科目 (言語聴覚学)	言語聴覚臨床総論	言語聴覚療法の現状を理解し、今後、求められる資質、知識、技術、責任を理解することができる。臨床に従事してからの最新の技術・知識・情報などをインプットし、それらを対象者に還元していく姿勢の大切さを理解する。それらの姿勢が対象者・その家族を支援する上で重要であることを理解する。言語聴覚療法の現状を理解し、今後臨床で求められる言語聴覚士としての姿勢を学ぶ。対象者またはその家族を中心とした言語聴覚療法を展開できるための姿勢を学ぶ。 (オムニバス方式/全15回) (全3回) 言語聴覚士の社会的責任を理解し、臨床現場や地域における役割を学ぶ。卒後のキャリア形成について学ぶ。 (全3回) 維持期・生活期の言語聴覚士の臨床について学ぶ。言語聴覚士の職業倫理や社会的活動の大切さを学ぶ。 (全3回) 医療保険・介護保険上での言語聴覚療法の役割や制度的仕組みを学ぶ。 (全3回) 回復期の言語聴覚士の臨床について学ぶ。臨床業務の実際を学び卒後の臨床のイメージを形成する。卒後教育の大切さを理解し、専門職としての生涯学習の重要性を学ぶ。 (全3回) 急性期の言語聴覚士の臨床について学ぶ。EBPに基づいた言語聴覚療法の重要性やそれに伴う医療の質の担保やリスクマネジメントについて学ぶ。	オムニバス方式